

・ 「障害」という分野における文化人類等の公共性を考えるのは特に難しいと感じた。この学問では「対等である」ことが重要視されるが、「自分には障害がない」と自覚する人にとって、障害のある人の立場にたつことはとても難しい。むしろ不可能と言ってもいいくらい、困難なことだ。異文化を理解しようという風潮は広まっているが、その「異文化」に障害者が含まれるケースは少数だろう。p.123で筆者も述べているように、長期的なスパンで社会の常識と変えていく必要がある。

・ 例えは「私は耳の聴こえない人、目の見えない人と同じ体験をすることはできないが」。そのような状況の中で、健常者の側からのみ彼らを理解しようと無理矢理型にあてはめれば「自己文化中心主義」と同じことになる。彼らの文化（言語、点字など）にたいしても他の文化と同様文化相対主義的観点から向き合わなければならぬと感じた。

・確かに文化人類学はお互いが理解しようとするところから成っているのに、障害に関しては、それが出来ないのが難しいところもあるのかなと思った。

・筆者は文中で、身体障がい者に特にフォーカスして身体的な歩みよりが出来ないがゆえの問題点を挙げていた。現在の社会では身体的障害のみならず、自閉症やADHDなどの身体的でない障がいも注目されてきているけれど、そこでの問題点やコミュニケーションとのかかわりはどのようになっているのかと思った。

・文化人類の役わりとして、文化と文化をつないだり、マイリティコミュニティと社会の橋あたしをするというのがあってもいいけれど、障がいの問題に対しても、この役割は大切だと思った。というのも、障がいをもつ人達が声を上げていても、健常者は自分達とは違うフィールドの人達としてとらえがちなので、静にかある無声コミュニケーションのようにそれが自然におこってきて、結局は同じようなコミュニティだということをつたえることが必要で、それが一番できるのか、人類学かなと思ったからである

・障害にも、自立できる人出来ない人もいて、程度とらえ方もそれぞれなので障害という一くくりでとらえるのではなく、それぞれのコミュニティをそれぞれにとらえることが必要だと思ふけれど、現状の教育などでは、障害者一くくりになっているのだから、それをどうやって変えていけばいいのかと疑問に思った。

し

筆者は障害をもつ人の例として3人を取り上げ、結論を「障害をもつ人はい」の二項対立ではなく「多様な文化をもつ多様な身体」という序列は二重の多様性という理解の中において発展的に解消される目があることを望む」ということだった。文化人類学における文化相対主義を発展させて「身体相対主義」が求められるということだが、3人のようにコミュニティを形成できる人々ばかりの対象ではいけないことを考えると、理想はやはり別のところか。障害をもつ人、と一括にまとめてしまうと身体相対主義が可能にも思われるが、障害のあり方は多様である。精神面の障害をもつ人のコミュニティも存在するのだから、私はむしろ、精神面の障害をもつ人の家族や周囲の人々のコミュニティが形成されるのではないかと思う。これを考えれば、身体だけを相対化しても障害をもつ人にまつ問題は解消できないのではないかと思う。

障害をもたない側への共感が起こるのは、大抵数人が「障害をもって
おらず、障害を持っている人の気持ちや状況などをやはり、どうしても理解すること
が難しいからであると思う。

私自身、どんなにかんがって理解しようとしたし、疑似体験をしたし
しても、障害を持つ人の気持ち、状況は理解できないと思う。しかし、共に
生きていく、そういう社会を作っていく努力はすべきだと思う。

そして、大抵数である障害をもっていない人が、障害を持っている人の気持ち
を考えると、取り組みや機会は大抵あるが、逆に、障害を持っている人が
障害をもたない人の気持ちを考える機会はあるのだろうか。論点が
ずれてしまってもいいか、あるドラマで、耳の聞こえない主人公は、友達をつ
く、彼らは、最初その障害にとまどいながらも受け入れ、普通の友達として
仲を深めていく。友達は、その障害をもつ女の子と話せるより手話を習得すれば
友達として話したいというたって普通の気持ちからやったことだった。そうやって、仲を深
めていった彼らだったが、その障害をもつ女の子が自分の特技であったピア(こい
耳が聞こえないことが原因でうまくいけなくなりましたときに、仲に亀裂が走った。
彼女は、本音であった自分のために、手話をみんなに覚えてもらうのは、いやだったし、
友だちたちが「どうかんがっても、自分の気持ちは理解できない」ということを言った。
そのとき、私は、「そうか、そうか、そうだね。私たちには、その苦しみは分からずあけられ
ない」と思った。しかし、友達の一人だった男の子が「お前は、そう言うけど、お前
自身は、お前と一緒にいたい。お前の苦しみを少しでも理解したい。乗らけてあげ
たいと思う。おれの気持ちや、そう言われて、傷ついて、苦しいおれの気持ちは分か
らないのか」というセリフに、そういう視点は、私にはなかったなあと思った。だから、
障害をもつ人が、いつでも調査される側、理解される側にいるのは、少しおか
しいのではないかと思う。障害をもつ人が、もたない人の気持ちや状況を調査し
たり、理解したりする機会や取り組みはあるのだろうか？ないのなら、そういう
機会がある方がより平等で互いに認めあえる世の中になるのではないかと思う。

8. 降宮

1966368c 岡村 邦尚

本書の原題で解いからかえては「出王前診断」。
 この存在は我々の降宮を扱ったものが、もたない例の視座
 として、存在しないうつ=こじす=あつた可もかでは
 ない。なるか。

この「出王前診断」というのは、いつたか秋前には存在した。
 像王に共通する部分に77にある。この像王前診断は、
 かん獄をこじすからなる。こじす... 77-1-1=こじす=77-1-1
 なたるにつはなる下らう。

P135. に、この降宮をこじすという向王あつかのこじすがある。
 「降宮をこじす/もたない」の=向王あつかによるこじすは、
 「77-1-1文化をこじす=77-1-1文化」という序列存在の
 理解が重要だ。

77-1-1の進化論は、一、直線の進化を下の(社会進化論、白人
 至上主義)へてはなす。種あつかに生物の進化していったこと
 示している。このあつかは、我々の身体は、種あつかに
 生物の気端、または過程にあるのである。



第8章 障害

DATE 6.22.水 NO.

<疑問>

- ・人種によって身体的特徴が異なるので、身体的特徴も文化の一部と見なしていいのではないか
→ なぜこれまでの人類学はその点から目を離してきたのか
- ・日本では障害者に対する考え方や接し方の教育としてどのようなことが行われているか
- ・24時間テレビなどで障害者を取り上げることは、障害者への理解を深めるのか、健常者で良かったという優位感を強めてしまうのか

<感想>

- ・障害者に対して、健常者が何かをして“あげる”という考え方は、一見協力的だが根本的には差別的だと感じた。
- ・筆者も述べていたが、マジョリティ → マイノリティの方向の理解だけが言式められても一方通向で、やはりマジョリティがマイノリティを理解して“あげ”ようとしている、と感じられるため、逆方向への理解や意見ももっと重要視されるべきだと思った
→ マジョリティがマイノリティに対してもつ優越感とともに、マイノリティがマジョリティに対してもつ劣等感もぬぐうべき
- ・障害の気持ちを分かったつもりにならずに、障害者に接することは溝を深めるだけだと思った
→ 「完全に」理解することはできないと念頭におくことが必要
- ・障害者と健常者を対等な存在としてとらえるには、「障害者=かわいそう」という概念を壊さなければならないのではないかと考えた。
- ・また、そのためには「幸せとは何か」を考えることによるのではないかと考えた。

第8章 障害

(疑問点)

P122 人間の精神統一性とはどういうことですか。

P124 文化人類学者は、調査対象の人たちとの間で、お互いに支援したり支援されたりする関わりを持つことが多いとあるが、調査対象の人たちからの支援とは具体的にどのようなものですか。

(コメント)

この章を読んで「障害」という問題を考える際に従来の「障害の有無」という視点や考え方が両者の理解の迷宮系を招く原因だとわかり、対等な相互理解を促進するためには障害もある種の個性の延長線上と捉える姿勢が必要なのではないかと感じました。なぜなら「障害」という言葉のインパクトが障害をもたない、そうした状況下にいない人たちにとっては重い印象を与えると思うからです。相互理解をすすめるためには全ては理解できなくても両者が互いに関わり、できる限り相手のことを知ることを大切だと思います。そうでなければ相手への無知が原因となる差別や疎外、排除のリスクはいつまでもなくせないし、共存などできないと思います。だからこそ相互理解への門戸を、「障害」を理由に閉ざすべきではなく、多様な個性をもつ人間同士の関わり合いという考え方を文化人類学者が積極的に広めていく役割を担えばよりよい社会になっていくのではないかと感じました。

「障害をもつ側/もたない側」という意識は、なくそうと思えば思うほどより意識してしまうように感じました。この二項性をなくし、「多様な文化をまとった多様な身体」と理解するまでには日弁明がかかるだろうなと思います。「高齢者」の章があったように、「障害をもつ側」も「支援を必要とする人」という認識が強くなると思います。その認識をなくしていけるようにすれば、「障害をもつ側/もたない側」という意識もなくなっていくのではないかと感じます。^{「難しいですわ」}「なぜ多くの人がとは障害をもたない側に共感してしまうのだろうか」とありました。障害をもつ側に共感ができないのではないかと感じます。テレビで障害をもつ人の特集番組を見ると、その人に共感するのではなく「大変なのに一生懸命生きているんだな」と障害をもたない側の目で見ることになると感じます。こういった目をなくして、障害をもつ側ではなく、ただ自分と少し違うだけの人として見ることができればまた変わってくるのではないかと感じます。

障害

文化人類学が障害の分野で力を発揮するためには、
障害を持つ人も持たない人も同じものとして考える
といふことだけでなく、身体の差異を認めたく
うえで、障害を持つ人と持たない人でなく、
多様な身体を持つ人々たちの共存をめぐり
必要であるといふことがわかった。

しかし、身体の差異よって生まれた手話などを
文化として表現することに対して私は疑問に
思う。ここでいう身体の差異は、マジョリティを占める
人々とは異なった部分、身体能力の欠如とも考えられ
る。また、そのような人々と共存するために必要な
は能力の欠如を彼らが埋めるより、障害を持たない
人々が歩み寄り、たがが「交差率」が高い。文化の共存は
その文化が「少数」であるか「多数」であるかにかかわらず
互いが歩み寄ることを必要とするので、手話などは
文化として認識するには不十分ではないかと
考える。

障害

私たゞ人間は障害を有する人に対し差別的意識

を有する。これは間違いない

と云う。しかしそれは二つの段階を

経る。第一は障害を理解する。第二はそれが出来るか否かはな

ら。第二は前者。どういふことか。差別という言葉は

よく似ている

ある意味、自分と同種[※]なものを認識しなければ起り

ない

得ない。そのためには、理解し合える素地があるのだ。

障害という言葉は「文化」として捉える。これは手はな

ら「他」の存在を知ることによる認識のこと。意味は得、理解は

二つ。族集するものは二つに分かれる。

障害者を不便な状況で生かすだけにならないかわいそうな存在と見なし、無意識に序列で捉えてしまうから、マジョリティである健全者は障害者の実際の生活を見ようとせず、理解せず、両者の間に断絶が起きてしまう。「多様な文化に多様な文化が宿る」という概念は、障害者を序列ではなく相対的横の関係で見ること、互いの理解を促進し、マジョリティの意思は「かり考慮される社会を変えるために重要なものである。身体の違いは現実として起えることができないが、両者の断絶を起えてお互いを知るためには、身体の違いを起える必要があり、そのためには、本書にも述べられている通り想像することが大事である。

障害を特殊な逸脱事例とは見なさず、健全な状態と対等に据えることは、口では言えても実現させるのはなかなか難しいものだと思う。まずここで述べられているろう者のような目に見える障害は安易に区別をされ、異なるものとして見られやすい。義務教育でも障害者は障害者というくくりで扱われている。また不便なイメージは自分たち健全者より劣等だという意識の形成につながる。一方で、効果的な障害者の宣伝（メディア、学術書、講演会等）は、聞こえるとは、見えるとは何かといったことを考え直すきっかけになりうる。個人的には「視えるということ」というドキュメント作品を観て、健全者は本当に目が見えているといえるのか、むしろ盲者のほうが視えているのではないかと考えさせられたことがあるからだ。

また後半部の、フィールドワーカーが障害者であったらという視点は考えたことがなく新鮮だった。観察対象だけでなく観察者にも多様性、身体的差異があるのは当然だが、観察対象以上に見過ごされがちな点であると思う。

8 障害

障害をめぐる問題として、「相手の言語・文化を習得する」ことは、ある程度可能であるが、例えば、「耳が聞こえないという身体的特徴を習得すること」はできないと書かれている。考えてみれば自明のことであるようだが、実際、立ち止まって考えると、自分と身体的特徴が異なる者の気持ちを、「理解した気になる」ことが問題である。

ここで、私が、私と異なる特徴を持つ者に安易に共感してしまうことで、「お前〜だろ」とは言わないにしろ、そういった、言外の「侮辱に近いもの」を相手に感じさせてしまうことは、非常にセンシティブでタブーに近いものだと感じた。

この章を読んで、「多様な身体の共存」について考えた。
。私自身も小学校のバスに乗って体験や目隠しなどの機会を通じて、
始めに思ったことは「その身体と自分とは大変で、私は恵まれている」ということだった。
どうしても、身体的にできることとできないことがある。それ障害を持つない「健常」者が、
よりできることが多.. (と思われている) から、マジョリティであるから、「障害」者に対して何かをして
あげよう、思いやりをあげようという価値感が支配的である。では「共存の共存」とは
どうなることであろう。本章で書かれていたフィールドワークの内容とその効果、すなわち
障害者の生活・コミュニティを明らかにすること、理解して伝えることはその第一歩なのかも知
れない。しかし、理解が浸透したからといって問題が解決するわけではない。「共存」とは
同じ乗り物に乗って同じテレビを見たり食べたりすることではなく、それができない人と生活する。
工夫なのか、それともどんな人でもできることに生活上の行為を合わせることなのか、いずれにせよ
理解の後の改善というが、対応の方法としていくつか考えられるが、誰がどの部分で「共存」と感じる
ことか焦点を当てるのか、「共存の共存」という言葉こそ思いあがりではないか、とも考えられた。
方向性が定まらず、非常に難しかった。

- 「障害」という問題は、障害をもたない人々は障害をもつ人が経験していることを完全に経験することはできず、理解することが難しい、ということから、とても難しい問題であると感じた。しかし、障害をもつ人への理解を放棄してはいけないと思う。p121の、障害をもつ子どもを殺害したおた親に対する減刑嘆願の運動が起きることがある、ということや、障害者を入店拒否・乗車拒否した店員や乗務員をわざわざ論調が責め出すことがある、ということを読んで、障害者の拒否方、扱いに驚き、この状況は正当化されるべきではないと思った。この文章にあるように、長期的な公共性により、人間観を変換し、障害者への理解に努める必要がある。

1. 身体的残疾所造成的人与人之间的隔阂是无法超越的。虽然人们一直以来都尽力与他人相沟通、相理解，但完全的心意相通是无法达到的境界，即使是同样健全、同样文化环境中存在的两个人，也有着个体的差异与无法相接的心灵地带。

2. 那么文化人类学应该如何克服这一障碍，尽量减轻人与人之间的隔绝程度，以达到其观察、指导、改造人类社会的宗旨呢。我认为只能尽量详尽、客观、细致地总结、分类不同的人群，并且极力追求一个包容、多文化共生、平等的社会环境。人类群体自身也包含着多种分群，不仅有种族、文化上的，也有各个方面的，每一个人都应该找到自己所属的群体，并且通常不只一个。这种和谐、共生的社会只有在多文化共生被广泛接受的前提下存在。因此，追求平等与接纳差异是亦步亦趋，互为表里的。

この章を通して、筆者は障害者の文化を文化相対主義的に捉えて、多様な文化から相対的に学ぶべきことがあると述べている。その上で、一般的にマイノリティとされており、マジョリティ側から一方的に表象されることが多い障害者の文化にフィールドワークとして入り、理解しようとしていた。しかしそこには限界があるように思う。その限界とは、本の中で挙げられていた「ある程度までしか参加できない」という点や、マジョリティの中にいる人類学者をこそよく迎え、参加に協力してくれるのか人が人によって異なる可能性がある点である。ある障害者は、「気持ちりが分かるわけない、同情するな」などと思うだろう。このような点から、従来の文化人類学を適用するのは厳しい。また、障害といっても非常に多様な障害者がいる。例えば今回はろう者のことが述べられていたが、彼らは他者とコミュニケーションをとるのがまだ容易である。だが発達障害の人の場合、人類学者の参加は可能であるのか？ マイノリティでかわいそう、保護されるべき存在として捉えられがちな障害者の人々の文化から学ぶべき、理解すべきことは多くあろう。だが、実際的に「新しい公共人類学」はどう関わっていくべきなのか、とても難しい問題であり、これからの課題だろう。

この章の内容は、共感で老子もつなされた。身体性の差異を考慮した上で、又にも相互性は、
現在の人類学において一般化はせず、私たちは、障害を持つ人々のことを、語りぬる側、聞
かれる側、挿入される側の存在として自分と委ねていてとらえてしまっている。障害者でない私たち
とは異なる。「おこうの人」という感覚があるからこそ、障害をもたない側への配慮をおこなうことも、
身体性の多様性を重視し、相対的性とおくまで追いつくことで、障害のある、各個人には異なる偏った
視点や無理解を是正していくことは至急であると思う。一方で、注は記されているように、身体性の
多様な行を著く先は、一人一人の個人であり、どのようなカテゴリーを想定していくかというのは、難しいこと
です。また、一概に障害、障害のある人、と言っても、その障害の有り様は一人一人、または、その障
や組み合わせては、異なるので、障害の種類によってそれぞれに注は記されている。つまり、障害のある側
と聞かれる側の両方の場を注は記して、障害のある側と聞かれる側の両方の場を注は記して整え
ていく必要がある。どのような注は記をするかは、人類学がこの問題に向かっているが、か何れも注は記
を要する。

[障害]

「障害をもつ/もたない」という二項対立でとらえると、障害をもたない人々は、マジョリティとして、もつ人はマイノリティとしてとらえられてしまう。しかし、身体的特徴は、それぞれ異なるため、「多様な身体」を認めていける社会の構築は大切であると感じる。

人々の意識を変えることは困難ではあるが、「長期的な公共性」にあつたらう、不可能なことではないと感じる。

8 障害 6/22

- ・人間には差異があって、決して優劣があるのではないと強調していた。しかし、単なる差異ではなく、有利、不利はあるのではないかと「優れている」「劣っている」という言葉では、印象は悪く、ニュアンスも少し違う気がする。ろう者がいわゆる健全な人と比べて、日常生活を送る上で「不利」があるのは明らかであるように思う。
- ・2つの課題に対して、模擬体験をするだけでなく、当事者の体験談が必要とあったが、それだけ理解が深まるのかと疑問に思った。

8章 障害

障害というテーマを扱う時に、この文章の中では文化人類学者が公衆人類学という学問を用いて、問題に取り組むことができると書いてあったが、このテーマは文化人類学者だけにとどめておくというのは無理な話ではなだろうか。障害を持っている人と直接接しているのは医療関係に従事している人だと思ふ。それならば、その人らと協力して治療を行うということが大切だと思ふ。

ただし、私がこう思うのは日本の現状だけを考えているからであって、他の国の障害者のとらえ方というのはよく分からない。日本は世界的に見ると、障害者のとらえ方は厳しいのだろうか。

本章では「障害」とトピックとして対等な相互理解について論じていますが、マジョリティの中に存在するであろう、障害を持つ人々を理解する気がない人や無関心の人にどのようにして相互理解の道が拓かれるのか、気になりました。文化人類学の中期的な公共性のところで、データベースをついたりウェブで公開するということがあったり、ワークショップを開いたりということが本文にありましたが、(特に)無関心の人々を巻き込めるのか、疑問です。

マジョリティ-全員の認識を変えるのはもちろん難しいと思いますが、公共空間において積極的に発信したいと気になってもらえないか思います。また、発信する際の注意点として、本文132~133ページにあるように、「当事者性」の高い経験が重要だと思います。単に知ったかぶりなく、相手の立場に立つて考えさせるような工夫が求められていると思います。

6/22

第8章 障害 コレト

No.

Date

私はこの章をよんで、障害をもつ人とふつうの人との間の距離について考えさせられた。まず、健全者、ふつうの人という区別をも差別を生み、障害をかかぬ人にとっては自分がふつうであるのに、障害者とくくるとは良いのかとさえ考えた。また今はまだ障害者を見ながら、目かけるのは当然と少し思っていたが、まずしてあげるといふ考えそのものが間違っていることを考えさせられた。相手の疑問や本音を同じと互いを理解しあうとある姿勢は大丈夫だけれど、しかし障害者の疑問や本音をあきらめるとも、彼らがふつうの障害者のための疑問や本音をあきらめるとも不可能であるという記述を読んで、障害とはできることをあきらめるのみで表面上で理解したようになりすぎるのは一番問題だとわかってしまった。これは互いに互いを理解するにしろどうしたらいいのかわかるとも相手とほかに良い話をするにしろどうしたらいいのかわかるともこのように話してほしくて可。

障害

6/22

NO.

DATE

今日の文化人類学では、身体能力の差異を扱う際には身体の一性を前提としながら、その人々に構成されてきた諸文化の理解を進めようとした。しかし、このことが問題となっている。

例で挙げられている手話については、人類学者は身体的差異（耳が聞こえないという点）を無視して、習得可能な手話のみを体得して他者を理解した点に注目しようという問題がある。

今後はこの身体・差異を考慮に入れた考え方が大切と思われる。

「高齢者」を読んで

私がこの文献を読んでまず思ったことは、渡した利が高齢者をどう捉えているのか、また語弊があるかもしれないが、どう扱うのかが非常に重要であるということだ。日本で高齢者に付随するイメージとして、社会的孤立や孤独死、無縁社会というワードがくることと思う。これはしばしばメディアが作り上げたものであると同時に、一般的に感じる感情なのかもしれない。しかしアメリカではそうではないことが良くわかった。アメリカでは、一人暮らしの高齢者は当たり前であり、むしろ自立・独立の象徴として称賛されるという。筆者が実際にアメリカで、一人暮らしの高齢者が自立と社会的つながりを維持しているのかをフィールドワークによって得た考察は今後の日本の超高齢化にどう立ち向かうか、大変重要な示唆を与えてくれるものだと思う。私が一番重要だと思うのは、高齢者自身に自分は手助けが必要な人ではなく、支援を行うことができる人だと思ってもらうことである。ジェファーソンセンターでは、高齢者が主体となって（ボランティアも高齢者）運営していく仕組みである。そうすることによって、高齢者は負い目を感じることなく生きることができる。このような仕組みを築けたのも高齢者に対する捉え方が日本とは異なるからではないだろうか。

「生殖医療」を読んで

私がこの文献を読んで、出生が「私」の部分に収まらず「公」に押し広げられていることがよくわかった。中国の一人っ子政策を考えれば、想像に難くないが、それはなにも外国だけではない。日本でも少子化対策と公には言わないまでも、それを目的とした医療技術の発達、推奨が行われていることに気づいた。読んでいて驚いたのは以前日本では、優生上の見地から不良な子孫を防止するために定められた「優生保護法」なる法律があったことである。明らかな命の選別で、こんなことが許されていたのかという思いにとらわれたが、よく考えてみると羊水検査によって障碍の有無を見極め、産むか産まないかを決めていることと大差はないと思う。また、血統主義的な考え方で、血のつながりを大事にするのは合理的ではないという考えがある一方で、DNA鑑定の発展で血のつながりが再び重視されるようになってきたという矛盾は非常に興味深い。AIDをめぐる問題が今日の多様化のもと、さらに複雑になっているのはこの文献を読んで、よく分かった。日本では不妊のためのAIDだが、欧米では同性カップルやシングル女性、男性のためにも主流である。そこで宗教との齟齬が出てくること自体は想像に難くないが、それは日本人には想像できない根深い問題だと思う。

「障害」を読んで

この文献で1番筆者の言いたい事は「多様な身体に、多様な文化が宿る」ということであり、その中でも障害をもつ人を取り上げ、障害をもつもたないという二項対立的構図ではなく、「多様な文化をまとった、多様な身体という序列がない認識をこれから持つべき」だと述べている。ぼくも確かにその通りだと思う。今までは障害を持たない人が、障害をもつ人にどう共感するのかという次元の話であったが、そうではなく、身体が多様性を認め合い、序列はないのだという意識が大切であると考え。この文献で初めて身体の差異に着目でき、その差異をどう乗り越えるかについて多くの新しい知見を得られたことは非常に大きいと思う。

民族学 8. 障害 レポート

NO.

DATE

文化人類学が障害をひとつの文化としてとらえ、文化相対主義の考えにもとづいたフィールドワークが行われていることに驚いた。

障害というものをひとつの価値観、文化として扱うことに違和感を感じた。ろう者たちが特定の価値観をもち、手話を語るものは、ろう者たちが、それを望み、その文化への所属感、欲を持っているからだろうか。

ふつう文化や所属というのは、複数の選択肢が存在し、その中で自分の価値におと、所属を選べるものではないだろうか。

このような手話しか話せないという立場で形成される手話話者の集団をひとつの文化とみることは違うのではないだろうか。

障害者の立場を理解するというスローガンで、中学校では車いす体験など、模倣体験が行われることもあるが、それは逆に、障害者を健常者より劣った存在として、その生きにくい困難さを体験し、思いやるという前提となる認識が存在するのではないだろうか。

- 。自分自身省めたとき、「障害の持たない者」の考えに共感し、意見を述べてきた。また、たとえ障害者の側を擁護あるような考えを持とうとも、それは「障害を持たない者」の論理に基づいて導き出した考えである。私は文化人類学者ではないので、フィールドワークを行い、文化相対主義の立場で、彼らの文化を真に理解あることはできない。そのために、文化人類学者たちが発信する情報に期待している。
- 。本章にも書かれていたが、車椅子体験等を行った際、「自分が障害がなくて恵まれている」という意見が出るのはむしろ普通だと思う。なぜなら私たちが健常者は身体的境遇において、マイノリティに寄り得ないからだ。だからといって理解をあきらめるのではなく、自分自身がマイノリティであるという状況を擬似体験することは非常に大切な経験だと思う。しかしそのときに抱く感想でさえ、「マイノリティの側は大変だと感じた」というような、当事者意識の欠いたものになるのではないかと思う。その点で障害者/健常者、マイノリティ/マジョリティの間の理解は私は不可能であると考えている。たとえそのような中で共生する方法を模索するならば、理解ではなく共感が必要だと思う。その共感が同情であろうと相手の立場で考えるという点では卑劣視あべきことだと思う。学者の立場ではなく、一般大衆の立場であるならば、同情というものを障害者と共生する上で、有用なツールなのではないだろうか。

第8章

障害

NO.

DATE

私には、障害者に対して、自らとは異なる他者とは感じることがある。
^{物理的}障害を持つ者に対する同情や敬意は多くあるが、障害者
自身の同情はあまりみられない。その理由は障害者に対する理解
が不足しているからであろう。ここにおいて他者理解という点で
文化人類学的アプローチはたいに有用であると考え。

しかし、あまりに身体的差異のために完全なる理解は難しい。
身体的差異は、まさに文化人類学が十分に取組んでこなかった部分
である。しかし、その身体多様性に向き、優者ではなく
多様性の受け入れが1つの主題である。つまり、障害を持つ/障害
を持たない、と言った私が冒頭示した二項対立的枠組みを打破し、
新たな多様性、フラットな枠組みを構築する必要がある。

ここで疑問点があるのだが、文化人類学的アプローチで多様性を受け入れるのは理解
できた。だが、実在の社会システムとして、障害者が非障害者と同様に生活する
のが困難な場合、どのように支援するのがよいのだろうか？ また、支援する側と被支援者との
支援者の二項対立が再び生じるのではないかと？

「障害」について

「障害」については、私が気になったことは、「障害をもたない人はどこまで障害もつ人を理解できるか」という、人間コミュニケーションの問題である。特に協調しておかなければ点は、障害をもつ人の理解はいかに可能か、障害をもつ人と障害をもたない人との互いの理解はどの程度まで「描かれる」だけなのかという問題解決である。社会的な面から考えてみれば、高齢者みたいに、障害をもつ人々も役立てない存在として見なされている傾向が強めていく。そのため、「障害」ではなく、「障害をもつ人」に対して、どうやって対応していこうとするのが大切なことを忘れてはいけないと思える。「障害」を妨げとしか思わなければ、「障害」の裏にある「個人」、つまり、自分自身と同じ「個性をもって生きている」人には気づけないのではないかと私が思っている。筆者が指摘した通り、お互いに生じる差異を乗り越えようと努力し、「血縁的」ではなく、「社縁的」な集団を作る必要を優先に置くべきだという。

この章のはじめに述べられているように障害にまつ問題について考えるときに、私も深く意識し「障害をもたない側」として問題を考えてしまうということに気がついた。今までに自覚もせずに校内を歩き回るガイドドゥームワークなどをしたことがあったが、そのときに思ったのは、「視覚障害者の人はいつもこんな風に大変な思いをしているんだな」とかうことであり、自覚せず、その状況にいるとは考えられなかったし、まして自分が少数で周囲の多くの人は自分と違う状態であるということは考えもよらなかった。障害を持つ「ない私が障害にまつ問題について考えるときには、自分は少数派で、周りの人は自分と違う身体の内組めとしており、自分以外の周りの人の身体が正常と扱われていると考えることができる」と、障害をもたない側としてその問題を考えるより、もっと深く考えられるのかもしれないと思った。そのため、筆者の考案したワークシヨップはとて役に立ちたいと感じた。

またこの章では主に聴覚障害者等の身体障害者に関する障害についての提言について述べられていたが、知的障害者のもつ障害についてはどのようにアプローチで考えていけばよいのか気がついた。

民族学 コメントシート

第8章 障害

障害を持つ人への理解に文化人類学的手法を用いるという発想が私にはとても斬新で新しく思われた。障害を持つ子供の母親がその子に何らかの危害を加えて裁判沙汰になった際、世間から上げられる母親の情状酌量を求める声が、ある種、自文化中心的な主張にもなりうるのである。今回の場合は聴覚に何らかの支障が生まれた人々であったが、これが脳であった場合、理解はどのようになされるのだろうか。差別的だと批判されるかもしれない。しかし、脳の発達障害をもつ人々との理解はどのようにしてなされるのだろうか、どのような方法が検討されているのか、どう検討するべきなのか、本章で言及してもらいたかったと私は思う。

障害

文部科学省のウェブページを見たら、日本の大学における障害学生の在籍率が0.3%に留まっていると書いてあります。その理由の一つとして、大学の環境や支援体制に関する情報発信の不足が挙げられました。よく考えてみたら、確かに学校やデパートメントスなど施設では、障害者向けの情報が少ないの気がします。別に障害者向けの設備がないというわけでもないのに、ホームページやパンフレットなどの情報紹介には、そのような情報を記載してないのはなぜなのでしょう。何を気かけてその情報を書かないのでしょうかと、少しい気になります。

(8) 障害

確かに「障害」という言葉はとてとて否定的で差別的な意味を持ち、障害者という言葉も健常者社会の否定的なまがせしに反映したものがもしもない。

このような歴史的、社会的な偏見に対抗していくためには、障害を持つ

人たちは自分のアイデンティティを見直すべきだと思う。例えば、ろう者が

自らを「聴覚障害者」ではなく、「手話という言語を話す言語、文化集団

として聴者に宣言すべき。そして、障害の持たない人たちも、障害の持つ

人々を自分たちと異なる文化、生活様式を持つ存在として理解するべき。

8、障害

研究内容そのものだけでなく、その過程が他の研究に応用できるという着目の仕方は興味深かった。研究者自身の置かれる立場を客観的に見ることで、より正確な研究ができるが、障害者への視点もそうだと思った。自分が健常者である限り、その人を完全に理解することはできないし、差別意識を無くすことも困難である。自分は差別意識の植え込まれた健常者であることを認識しながら接する必要があると感じた。

また、障害の特性ごとに分類して考えるというのは文化人類学的には有効な手段かもしれないが、個人の背景を無視する危険性もあると思った。同じ障害特性を持っていても、背景が違えばニーズも能力も違う。そのことを考慮しないと、障害を持つ人々に役立つ研究はできないのではないかと感じた。

身体の差異を乗り越えた理解については、障害だけに関わらず、年齢や男女差、人種など様々な分野でも課題となっている。どちらかを対象としてみなすのではなく、対等な関係としつつも配慮を忘れない。時には自分の深層意識とも戦う必要がある。それらを自分たちで行うだけではなく、この分野に興味のない一般の人々にも広めていくことが公共人類学のやるべきことなのではないかと思った。

8. 障害

「出生前診断」で生む側/選ぶ側の権利のみが重視されるとされていたが、生まれる側に対して共感するとはどういうことだろうか。

バリアフリーやユニバーサルデザインなどの考え方も浸透し、障害のある方々への配慮に様々な場で見られる。しかし、健全者に比べると生きやすいとは言えないのではないかと。(自転車が点字ブロックにおいてある) 障害者の方の言葉を聞いたことはないか

状況として生きやすい世の中で障害があると分かった状態で生きることを感じるのとは共感と言えるのかと疑問に思った。

(何が正解なのだろうか)

「8. 障害」

和達は小学校の頃から「障害者(本馬)」として

アイマスクを付けたまま歩き回ったり車イスを使う授業を受けてきました。

しかし、それを實際に「本馬」してみただけで感じたことは、このような授業はこの本文にもあるように、「かわいそう」という同情しかおまないといいことです。

別の授業で「障害」に関する講義を受けたことがありますが、

神大の

この授業ではいかに「障害者」が「和達」と「一糸者か」ということに

焦点が「あたっていました。實際に「障害者」の方に話を聞いたのですが、

内容も自分の「障害」についてではなく、日常生活や好きな月1101について

の話など「普段和達が「友人」と話すものと大差ありませんでした。

文化人類学者に関わらず、「障害」を「かわいそう」という目線ではなく

対等な目線で理解するためには、「障害者」としてだけでなく

健常者の友人と同じように交流することが必要だ」と思います。

また、本文内に登場した、「人は言語を話す。その言語には音声言語と

手話言語の両方が「含まれる」という一文が「印象的でした。

手話を言語として「足らなかつたため、「手話を使っている」というだけで

その人を特別視してしまう恐れが「高まると感じました。

民俗学 コメントシート

2016年6月22日

(8) 障害

・障害を持たない人が、一時的に障害を模擬体験すると理解の断絶が生じる可能性があると思いました。これは、身体的障壁により、こちら側が向こう側を理解することの難しさを示していると思いますが、障害を持つ人が、仮に障害のない状況を模擬体験できるとしたら、同じように理解の断絶が生じてしまうのか疑問に感じました。身体的障壁があるだけでこんなにも相互理解が生じてしまうのかと思いました。

・ろう者のコミュニティでは、学校や教会、NGOなどの場を集めて形成されるとは聞いていますが、手話の国によって異なっていると聞いたことがあるのですが、上記のコミュニティは、同じ国の人たちによって形成されているのですか。

・人工妊娠中絶を反対し、生命を尊重する立場の人 例えは正統的なプロテスタント教会の人は、障害や遺伝病をわが子ともの出生の可能性を予測する「出生前診断」について、どう思っているのですか。

障害

本章では「多様な身体の対等なる共存」つまり身体の相対主義を確立することが大切で、差異を基として人間を序列すべきでないと言っているが、ろう者など障害者の疑似体験を完璧に行うことは不可能であるから、理解したつもりでも彼らを完全に理解することは不可能であり、この状況では本章で望ましいとされている身体相対主義の確立は相当厳しいと感じた。

多くの人は「障害をもつ側」と「障害をもたない側」との衝突が起きた際、無意識のうちには「障害をもたない側」に共感し、問題を捉える傾向があると示された上で、筆者は文化人類学の三つのフレームワークによる公共性に関する研究を照らし合わせている。以下本章における疑問点がある。

- ・筆者はここまでの文化人類学の調査方法が「身体が同じである」という前提に基づいたものであり、「身体が異なる」障害をもつ人々に対する調査には限界が生じる、と指摘した。しかしこのような指摘は今までおこなわれてきたのか。もし指摘されることがなかったとすれば、その原因は何なのか。

日本の全人口のなかで、ろう者などの「障害」を持つ人は
何%くらい占めるのか気になった。小学校の道徳の時間で、
よく「障害者」と人権の勉強をしますが、そこで想定されていた
ものは日本人、あるいは日本国内に限定的なものだ
あったと思う。文章では、アフリカのろう者のフィールドワークが
例に挙がっていましたが日本に比べて、アフリカにはあるような
新たな課題や現象もあつたのではないかと思った。

『公共人類学』第8章 障害

人類学の視点から障害の問題を研究する際には、感情論を一切抜きにして完全に研究対象として扱うため、障害があるからといって同情をすることで偏った視点で考えることにはならないと思う。しかし一方で、研究対象として障害者という存在を一般化することで、健常者にとって障害者は自分たちと異なる人たちであるということを実際立させることになるのではないか。人類学の視点から障害を研究することで、より多くの人に障害に対する理解や必要な知識を広める点は重要であるが、これは人権問題と常に隣り合わせのように感じる。

また、文化人類学者側が、体が異なるという点で壁を感じるのと同様に、障害者は「自分たちの気持ちや苦労は分からない」と健常者との間に気持ちの部分で壁を感じるのではないだろうか。これは、文化人類学者からの一方的な働きかけだけではどうにもできない。さらに、障害の種類によって研究に対する関わり方や取り組み方がそれぞれ異なり、そこに障害を研究するということの難しさがあるように思う。

障害の正しい認識や理解を広めるという公共性は重要である。人類学者がその役割を担う意味も重要であると思う。医学の専門家との違いは、着目する視点が障害者のコミュニティや、コミュニティに参加する上での障壁となるもの、その解決策などにあること、つまり公共性にあると思う。

障害をもつ人たちのコミュニティを自文化とは違う文化をもつものとして
文化相対主義的に見方をし、文化人類学者が行ってきた
フィールドワークの手法で知るべきだ"と語るのではなく"という考え方は
新鮮であった。私は身近に障がいをもつ者がいたため、彼らの
コミュニティを自分とは違う文化であるものとして見たことがあった。
それはやはり環境が文化を形づくるものであるという認識が
根づいていたからかもしれない。同じ場所で生活をしているが
異文化文化というものが存在すると思わなかった。しかし、環境
以外のものが文化を形づくるとわかったことで、自分の周りにも
様々な異なる要因によって様々な文化が形成されている
のだ"ということに気がした。

8 章 富

- P125 言語集団 (方言文化を形成する人(に)ち(に)する集団) は、
階級集団と区別がつけられることのできるのか。
- P125 方言文化とて、ひとつのコミュニティーと定義することは、「コミュニティー」
の定義の拡大を意味することでもあるのではない。
- P127 知識の共有の方法とて、相手からのプロセスに東返る
ことばかりある方法にはどのようなものがあるのだろうか。
(論文や著書、ウェブのみの場合、相手(側)からのプロセス
がなければ知識共有が難しい)
- P129 「どうして相手の言語を覚えようとするのかわかりませんが、
強要することにはないか?」(Q8) は、論が飛躍して
いるのではないか。前提ではないか? (前提を前提として
とらえないということなのか。)

文化人類学における文化相対主義という考えには、「身体の斉一性」を前提していたことがよく分かった。一方で同じ文化、同じ民族内での身体障害のある人ない人に注目していくということは、注目していかなければいけない単位が一人ひとりの個人になってしまい、特定の文化にあてはめるために、実際には違う要素を持つ個人をひとくりにして考えてしまうのではないかと思った。

身体の差異を意識することは、精神の差異を意識することと比較して容易なと思うが、精神の差異をどこまで考慮できるのかなと思った。精神的な病気はもつ人、病気とは考えられない

「コミュ障」など本人も正確に認知できていない差異は考えることができるのか気になった。その場合それぞれの個人が生まれ育った家庭環境とかを教えるのかと思うと、いよいよ昼のワイドショーの記者のようななと思った。どこまで環境などを教える原因論に依って教えていけるのか疑問に思った。

人種主義を否定し、人類の身体の斉一性を前提にして文化相対主義を徹底させた文化人類学という分野からこそ、身体性の違いによる文化の差異に気づきにくいという一面にはとしました。ユニバーサルデザイン、グローバル化と世界の一般化・普通化が進んでいる状況でも、障害をもっている人にはどこかこちらから視線を引いてしまっているような感覚がありましたが、その原因がどこかにその立場に寄り添っても身体性の違いを乗り越えられたいからではないと明確にすべきです。障害を持つのは個人・社会の立場から障害をもつ人への「配慮」という側面が取り上げられることはありますが、障害も個人の多様性の一つとして社会から連続的に見られるように努力をしていくべきだと思います。それに、フィールドワークの立場から文化人類学も貢献できるはずです。

Kamei is of course right to point to Deaf cultures and communities as instances of cultures, and cultural differences, being informed by Deaf people's bodily characteristic of deafness. This claim, however much of a strategic advantage it may hold, is a dangerous essentialism. Deaf cultures and communities are formed by linguistic minorities who communicate in sign languages. As the auditory canal is blocked, visuo-gestural modality becomes the most convenient option for language transmission. The actual languages are created and passed on in communities, though, and as Kamei himself points out Deafhood is seldom hereditary. Without Deaf others, therefore, neither Deaf culture nor a sense of communal belonging will be developed by a child born deaf, as is frequently the case even in societies with vibrant Deaf communities. Especially the degree of hearing loss and the respective social context are key factors influencing this development. Kamei's model therefore seems dangerously simplified to me, as it suggests homogeneity among deaf people, minimizing the impact societal structures have on identity formation.

2016/06/22 『公共人類学』コメントペーパー 8. 障害

筆者は文化人類学の3つの公共性について、異なるスパンで分類しているが、【短期的な公共性—その場に居合わせて関わる】について考えたい。これは、学術的な調査をしている文化人類学者だけに当てはまることではない。私たち自身も日常的に障害を持つ人々に遭遇する、あるいは関わる機会があるだろう。しかし、筆者が言うように、「身体的な違いを置き去りにしたまま、習得可能な要素だけをかき集めて、他者を理解したつもりになってしまう」ことは往々にしてあるだろう。それは、偶然の人助け、何らかの理由があって参加するボランティアなど様々だが、ある瞬間やある期間だけ他者を理解するという一過性の出来事になるという問題が指摘されると思う。私自身も、中学校で目隠しや耳栓をして廊下を歩いたり、車椅子に乗ってみたりするワークショップに参加した経験があるが、障害をもたない自分が“体験”しているという意識が常に頭にあり、他者の理解に苦しむという経験がなかった。よって、上のようなワークショップは「障害をもたない側への共感」を生むのであって、障害をもつ側への共感ほうわべだけのものになってしまっているのだ。だから、文化人類学が与えるべき公共性とは、他者の理解へのプロセスなのではないだろうか。そして、異なるスパンで考えられる3つの公共性は、一時的なものに終始しないために、連続性をもつ必要があると考えられる。身体は他ならぬ自分の所有物である以上、身体の差異の越境は大変難しいが、少なくとも「障害をもたない側への共感」を生み出さないことが、始めるべき課題の一つであると考えられる。

8. 障害

障害という問題や、慢生社会の問題(特に出生前診断の倫理的課題)は、私にとりて解決しなかったものだと感じていた。でも、障害は文化的な課題よりもむしろ、どうにもできず、身体的課題であることが、77年からである。だから、この論文において、かなりポジティブな結論を下されたことには驚いた。

また、これは蛇足的な感想かもしれないが、手話言語が137種以上存在することには驚いた。ろう者をモデルにした小説や漫画を何作か読んだことがあるが、その度に手話は万国共通の一言語だと誤解をしていた。

p.127半ばに記述されている「調査者でありながら、障害者でありながらの権利運動の参加者」にもなるというものは、公共人類学を体現しており、わかりやすく大変意味のあることだと感じた。

最後に、p.132の末尾に記述のある障害の模擬体験の条件について、述べられているものに付与して「障害を帯びて生きる上で必要な様式(ex.手話・点字)を習得している」という状況も体験して欲しいより深い理解には、77年から78年の間は、たいかと思、た(もちろん、それは一朝一夕に実現できなかったらうが)。

• p130に「文化は身体によっても規定される」とあり、耳がきこえない、目がみえない人々からみれば世界は私とはちがうとあり考えたことが「あったのだ」、とても良い視点を獲得できたと思った。

• p132に 障害をもたない学生や生徒を対象に、一時的に障害の不寛容体験をするワークショップは理解の断絶を招く恐れがあり、当事者性の高い条件のもとになされる経験として受容される必要があるという考えは、非常に共感できた。この考えは教育機関で徹底されないといけないと感じた。

• 障害者ときいて毎回あもいた話だが、以前テレビ番組で「ビビタケシマ」特集は、「お前は足が不自由でかわいそうだな!」と障害者がいわれたときに、障害者の方も「お前も月凶三ツがホホコ、アホでかわいそうだな!」と笑って言いあうことができた世界になれば良いと話していたものだ。障害に関わらず背の高い人、低い人もみえる世界、文化は異なると感じるのだから、障害者を特別視しない社会になればいいなと思った。

障害者にとり快適な共存がこころ社会を実現するこころが障害者に関する問題では必要とこころるこころ、こころのためにまず障害者の立場にこころ、こころ考こころるこころは不可こころである。こころこころ他者の文化・社会にこころ入りこころの目線こころ物事こころ見こころるこころをこころ実践こころしてきた人類学の手法はこころ大いに役にこころ立つとこころ考こころらこころれる。本章にこころ述べこころらこころるこころように、こころ本当に障害をこころもつこころ身にこころ自こころがこころこころるこころはこころ不可こころ能こころだが、こころこころこころこころるこころのこころ状態にこころ近いこころ状態をこころ身にこころこころみこころるこころこころや、障害者の声にこころよこころこころ身こころ傾けこころるこころこころ、障害のこころこころ人こころのこころ偏見にこころよこころるこころ一こころ方的にこころ障害者の立場のこころ想像こころこころこころこころ動かこころこころよこころるこころこころこころこころ重要こころである。こころこころこころこころ、文化のこころ多様性をこころ認こころめこころるこころのこころと同様にこころ身体もこころ人こころこころこころるこころ多様性こころのこころこころあり、障害をこころもつこころこころ、こころこころこころこころこころこころのこころ多様性の中こころのこころ一つこころこころあるとこころ認こころ識し、おこころ互いにこころ認こころめ、尊重こころ可こころるこころというこころ立場をこころ文化のこころ多様性をこころ認こころめこころる文化相対主義をこころ根こころ付こころかせこころるこころこころこころ人類学こころこころ今後、こころよりこころ浸透こころさせこころるこころのにこころ重要はこころ担こころい手こころにこころこころこころるこころこころ思うこころ。